



西日本新聞社「石橋湛山記念 早稲田ジャーナリズム大賞」を受賞

コンビニ、飲食店、語学学校、工場に外国人がいる。漁港や畑や介護施設にもいる。私たちのまわりに若い外国人の姿が増えたことは、誰もが気づいている。だが、彼や彼女たちはどこから、どんな経緯でできたのか、日本でどういう暮らしをしているのか、私たちはほとんど知らない。本作品は彼らが学び、働き、暮らしている現場だけでなく、出身国の送り出し機関まで取材し、その荒んだ実情を次々に明らかにしていく。根本にあるのは、異文化に不寛容なまま、3K仕事の人手不足を補うため、「留学生 30 万人」のかけ声の下、低賃金労働力だけを集めようとする日本政府の政策である。「労働力を受け入れたつもりだったが、来たのは人間だった」。私たちの側には、彼らを人間として見、人間としてつきあう準備がまったくできていない。そして、この多様性を拒絶し、周縁に押しやって、見て見ぬ振りをする姿勢自体が、この国の経済や政治や文化が活力を取りもどす機会を失わせているのではないか、という指摘は鋭い。

授賞理由（選考委員：吉岡忍氏）

西日本新聞社「新 移民時代」取材班（代表 坂本 信博 西日本新聞社編集局社会部デスク兼遊軍キャップ）は、第 17 回 石橋湛山記念 早稲田ジャーナリズム大賞「草の根民主主義部門大賞」を受賞された。従来タブー視されてきた外国人問題に、敢然と、熱意をもって取材し、継続された勇気とチームワークに喝采を送りたい。受賞をさらに際立たせたのは、上掲授賞理由。この問題に造詣の深い人たちなら、流石と唸るに違いない素晴らしい授賞理由。取材班面々にとっても、1 年の苦労が報われた気持ちと察する。

同取材班は、昨年来、未来を創る財団の企画したワークショップ、ラウンドテーブルなどにも広く参加されてきた。6 月 17 日には、九州大学西新プラザキャンパスで、新 移民時代公開シンポジウム「フクオカ円卓会議」を未来を創る財団と共催した。



本賞は広く社会文化と公共の利益に貢献したジャーナリスト個人の活動を発掘し、顕彰することにより、社会的使命・責任を自覚した言論人の育成と、自由かつ開かれた言論環境の形成への寄与を目的としている。同社取材班の今回の受賞は、定住外国人政策研究会全員ともに喜びを分かち合いたい。未来を創る財団としても、ご同慶の到りである。